

仲間と共によりよい自分や生活をつくり出そうとする生徒の育成 ～居場所・絆づくりにつながる学級経営の充実を通して～

恵那市立恵那東中学校 平成25,26年度研究推進委員長：原 誠

概要

【主題設定の理由】いじめや不登校の未然防止のために、『居場所・絆づくり』が重要だと考えた。

【研究仮説】生徒が安心して自己存在感や充実感を実感できる場をつくり、仲間と共に主体的に取り組む活動を位置付けた学級経営を行えば、仲間と共によりよい自分や生活をつくり出そうとする生徒を育成することができる。

【研究内容】(1)指導計画の充実 ①学級経営案の工夫 ②ステージ構想図の工夫
(2)指導方法の充実 ①居場所づくりの工夫 ②絆づくりの工夫

【成果と課題】**成果**・行事を核としたステージの作成と漢字一文字のステージ目標

・ハイパーQ Uを生かした授業における生徒への指導・援助

・「リーダー会」「生徒作文」「集団決定」を生かした学級活動の話し合い

課題・自分の思いを伝えたり、表したりする表現力を鍛える工夫

I 研究構想

1. 主題設定の理由

(1) 教育目標から

【教育目標】知識を深め 心豊かに 躍動する生徒

【校訓】切磋琢磨

本校の教育目標と校訓から、願う生徒の姿を下記のように設定した。

- ・自分の願いをもって、主体的に取り組もうとする姿
- ・仲間の考えを理解し、その思いに応じて行動する姿
- ・仲間と共に活動し、自己存在感や充実感を感じられる姿

(2) 生徒の実態から

本校の生徒の実態としては、下記のようなよさや弱さがあると考えられる。

- 行事やキャンペーン活動に積極的に取り組むことができる。
- リーダーの呼びかけに応じて、行動することができる。
- 自分の思いを語ったり、仲間の思いを受けとめたりすることに弱さがみられる。

(3) 生徒指導上の今日的課題から

県の公立小・中学校の不登校児童生徒数は、ここ数年ほぼ横ばい状態が続いているが、不登校児童生徒の半数以上が、毎年新しく不登校になる児

童生徒である。また、生徒同士のコミュニケーションのあり方にも課題がある状況の中、いじめや不登校の未然防止は県の今日的課題となっている。本校においても同様の課題があり、改善を目指すためにも『居場所・絆づくり』が重要と考えている。

2. 研究仮説

生徒が安心して自己存在感や充実感を実感できる場をつくり、仲間と共に主体的に取り組む活動を位置付けた学級経営を行えば、仲間と共によりよい自分や生活をつくり出そうとする生徒を育成することができる。

3. 研究内容

研究内容(1) 指導計画の充実

①学級経営案の工夫

- ・行事等を核にステージを設定し、めざす生徒の姿を明確にする。

②ステージ構想図の工夫

- ・生徒の実態を把握し、生徒の意識の変容を構想する。

研究内容(2) 指導方法の充実

①居場所づくりの工夫

- ・ハイパーQ U等を活用し、自分や仲間のよさを実感できるように工夫する。

②絆づくりの工夫

- ・話し合い活動等を活用し、学級の誇りを実感できるように工夫する。

「居場所づくり」とは、児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所を提供することを指しています。すなわち、教職員が児童生徒のためにそうした「場づくり」を進めることであり、児童生徒はそれを享受する存在と言えます。

「絆づくり」とは、主体的に取り組む共同的な活動を通して、児童生徒自らが「絆」を感じ取り、紡いでいくことを目指しています。「絆づくり」を進めるのは児童生徒自身であり、教職員に求められるのはそのための「場づくり」、いわば黒子の役割と言えます。

『生徒指導リーフ「絆づくり」と「居場所づくり」』国立教育政策研究所

以上のように『居場所・絆づくり』は定義されている。本研究では、『居場所づくり』のために、**自分や仲間のよさ**を実感できるように工夫をし、『絆づくり』のために、生徒が**学級の誇り**を実感できるように工夫をする。

自分や仲間のよさを実感することができれば、自己存在感を感じることができ、それが居場所につながっていくと考えられる。また、自分の学級に誇りをもっている生徒は、もっと自分の学級をよくしていきたいと自発的な思いをもって行動をしていき、それが生徒の絆づくりにつながっていくと考えられる。

Ⅱ 研究実践

1. 研究内容(1)-① 『学級経営案の工夫』

学級経営案の作成にかかわり、工夫した点は以下の3点である。

- ・ 行事を核とし、1年を5つのステージに分けた。
- ・ ステージの目標を漢字一文字で表し、ステージの特徴をイメージしやすくした。
- ・ 生徒の意識の流れ図を書き、目指す姿を明確にした。

恵那東中学校では、行事を核として1年を5つのステージに分け、そのステージの目標をテーマとして漢字一文字で表すことにした。こうすることによって、各ステージの特徴がイメージしやすくなり、常に目標をもって学校生活を送ることができると考えた。以下の表が各ステージの目標と核となる行事である。

ステージ	テーマ	核となる行事
1	開彡 (かたち)	授業参観
2	繋 (つながり)	宿泊研修
3	挑 (いどむ)	体育大会
4	倉 (つくる)	合唱発表会
5	言 (ほこり)	絆の日

学級経営案の作成にあたっては、次の手順で行った。

最初に特別活動主任が特別活動年間指導計画で、各ステージのテーマを受けて「各ステージの目標」を明確にし、「1年間の様々な行事と生徒の意識の流れ」を構想した。次にそれを受けて、学年主任が学年経営案で、「各ステージの具体的な目標」を設定し、「各ステージで目指す生徒の意識」を生徒の言葉で表した。最後にそれを受けて、担任が学級経営案を作成した。このような手順で学級経営案を作成することによって、全学級が共通の思いをもって学級経営を行うことができた。

また、学年経営案と学級経営案では、「居場所づくりに関わって大切にしたいこと」「絆づくりに関わって大切にしたいこと」という項目を設け、指導・援助を具体的に書くことによって、研究主題をより意識して学級経営が行うことができた。

このように学級経営案を工夫することによって、時期によって目指す姿が明確になり、ステージごとにつけていく力や、それに対する指導・援助を分かりやすくすることができた。

2. 研究内容(1)-② 『ステージ構想図の工夫』

ステージごとにステージ構想図を作成した。これは、そのステージにおいて着目する生徒を抽出し、その生徒の意識をどう変容させていくのかを構想したものである。「個の成長が学級を成長させ、学級の成長が個を成長させる」というイメージで作成した。その作成手順は以下の通りである。

- ①学級の実態を踏まえて、気になる生徒、変容させたい生徒を抽出する。生徒を抽出する時、ハイパーQ Uの結果を参考にする。
- ②抽出生徒は最初どんな意識でいるのか、そして、ステージを通して、その生徒をどんな意識に変容させていくのかを構想する。この意識の変容を曲線で表し、意識の高低を明確にする。
- ③抽出生徒に対して、どの場面で、どんな手立てを用いて、意識を変容させていくのかを明確にする。

このようにステージ構想図を作成することによって、そのステージの指導の見通しがもてるようになった。そして、生徒の意識はどこで下がっていくのか、それに対してどんな手立てを用意しておけばよいのかなど、生徒に対する声掛けなどの指導・援助が明確になった。

また、各ステージ終了時に、このステージ構想図を参考にして、教室の背面に「学級のあゆみ」の掲示物を作成した。こうすることによって、「生徒の意識の変容」が学級に残り、話し合いなどで過去の意識を振り返るときに役立った。



平成26年度 恵那東中学校 第2ステージ構想図〔2年4組：水野雄介〕 5/12(月)～7/6(日)

ステージテーマ：繋(つながり) ステージ指導目標：宿泊研修や命の日の取組を行うことなどを通して、仲間と共に協力して活動することのよさに気づき、仲間との「繋がり」を深めることができる。

□…予想される抽出生徒の意識 □…主な活動 □…核となる活動 □…学級活動 ○：お祝い ◇：手立て

	5月後半	6月	7月前半
若狭研修	若狭研修に向けて ○第1ステージつけた力を も発揮できるように仲間と協力してやりきる。 ◇「時間行動」と「聞き方」についてCP行う。班会議をして、学級全体や班の課題を明らかにし、班で協力しながら取り組む。	繋がりを感じられる合唱の取組 ○繋がりを感じられる「合唱」を通して、仲間との繋がりが感じられるようにする。 ◇他学級、学年と合唱交流を通して他学級、学年の合唱のよさを学ぶ、自分たちの合唱を高める。	命の日 ○宿泊研修の様子や、キャンペーンの取組の成果と課題を発表し、学級の成長を感じることができる。 ◇宿泊研修や、繋がりを感じられる「挨拶」「合唱」「授業」の取組で、仲間との繋がりが感じられた場面や、仲間同士の関わりの中でのいい姿を発表させる。学年合唱、発表会時に一人一人が思いを伝えるように。
意識変容のための手立て	若狭研修に これまで話したことがなかった仲間と話をして、楽しく過ごした。学校でつけた力が本物の力と云えるように、「時間行動」と「聞き方」を頑張ろう。リーダーたちの呼びかけにすぐに応えよう。	生徒の意識の変容 いきたいな。もっと仲間の輪を広げていきたいな。学級の絆をもっと深めていきたい。「合唱」や「挨拶」の音が小さいのが気になるな。	意識変容のための手立て 繋がりを感じられる「合唱」の取組の振り返りを行い、成果と課題を明らかにし、今後の目標を決める。 ◇事前にアンケートを行う。
若狭研修振り返り	若狭研修でこれまであまり話したことがなかった仲間と話をして、楽しく過ごした。学校でつけた力が本物の力と云えるように、「時間行動」と「聞き方」を頑張ろう。リーダーたちの呼びかけにすぐに応えよう。	繋がりを感じられる「合唱」の取組の振り返りを行い、成果と課題を明らかにし、今後の目標を決める。	命の日の取組の振り返りを行い、成果と課題を明らかにし、今後の目標を決める。
行事	・委員会：12日(火) ・スポーツテスト：14日(水) ・生徒集会：15日(木) ・若狭研修：27日(火)、29日(水)	・期末テスト：18日(水)、19日(木) ・委員会：18日(水) ・つながりCP ・繋がりを感じられる合唱の目標決め ・学年合唱交流会 ・繋がりを感じられる合唱の振り返り	・運動会：2日(水) ・命の日：3日(木) ・中体連：5日(土)、6日(日) ・CP、授業参観の振り返り ・命の日の振り返り ・3- (1) 生命の尊重
課題	・若狭研修目標決め ・若狭研修係会 ・若狭研修振り返り：29日(木) ・1- (1) 節度・調和のある生活	・繋がりを感じられる合唱の振り返り	

3. 研究内容(2)-① 『居場所づくりの工夫』

(1) 『Shall We Talk?』の活用

平成21年度から『Shall We Talk?』というアンケートを月に1回実施している。これは、生徒一人一人の意識の把握やいじめの早期発見を目的としたものである。

このアンケートで、悩んでいる生徒に個別に声をかけて話をすることができた。いじめやからかいがあると答えた生徒からは話を聞くことができた。このように、生徒が安心して生活することができるよう心がけた。



(2) 『ハイパーQU』の活用

①講師を招いての研修会

**日にち：平成25年6月21日
平成26年5月26日、8月5日**
**内容：ハイパーQUの活用の仕方
クロス集計の活用の仕方**
講師：山田明彦（財団法人応用教育研究所研修主事）



生徒一人一人に居場所をつくることできるように、山田先生を招いて、ハイパーQUの職員研修を2年間で3回行った。

1, 2回目の研修会では、QUの意義と目的から始まり、QUの結果に表れる4つの群の生徒の特長、そしてそれらの生徒の対応の仕方を学ぶことができた。3回目の研修会では、「標準学力検査NRTとのクロス集計」についてのお話を聞き、QUの結果を学習指導に生かしていくことを学ぶことができた。

群名	特徴	対応
学級生活満足群	学級内に居場所をもち、自分の価値を認められている。	活動を認め、より広い領域で活動できるように支援する。
非承認群	認められていることが少なく、自主的に活動しようとする意欲が低い。	小さながんばりを見つけてほめる。 一人一人が評価される内容や場面を設定する。

侵害行為認知群	いじめや悪ふざけを受けている可能性が高い。 自己中心的な面がある可能性が高い。	被害者意識が高い可能性があるので、問題があった時は、教師は中立の立場で対応し、相手の気持ちを考えさせる。
学級生活不満足群	いじめや悪ふざけを受けている可能性が高く、学級内に自分の居場所がなく、認められる機会が少ない。	休み時間などの日常観察を重点的に行う。 意識して声をかけ、相談しやすい雰囲気をつくる。

②学年会での交流、分析

中学校は教科担任制なので、学級担任だけがQUの結果を知っていても、生かす方法が限られてしまう。そこで、ハイパーQUの結果をより活用するために、定期的に行われている学年会で利用することにした。学年会での生徒の様子の交流の際に、ハイパーQUの結果を話題にした。そうすることによって、より多くの職員で共通理解することができた。また、本校は授業をほぼ学年の職員が担当しているので、学年会で話題にすることによって、授業において共通理解をして指導にあたることができた。

また、夏休みには『QUの分析会』を設け、校内や校外で行ったQUの研修会を生かし、1学期に実施したQUの結果の分析をし、より多くの生徒が『学級生活満足群』に入るように手立てを考えた。この手立てを考える際には、「承認得点」と「被侵害得点」を決める質問項目に注目し、どのような手立てをうてば、それぞれの項目をより向上させることができるかを考えた。

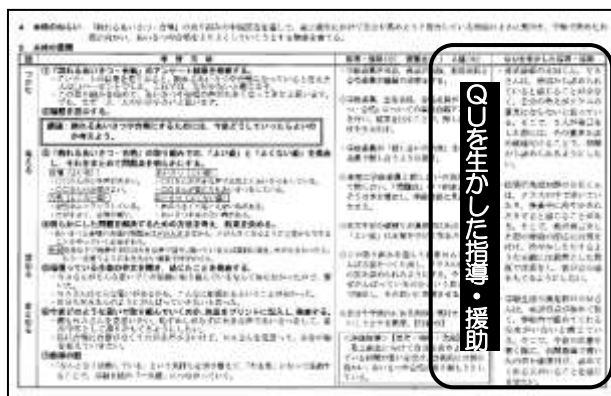
この研修会では、学年ごとに集まり、一つの学級を複数の職員で分析をして、今後の対応を確認した。生徒の様子を理解している職員が複数で分析することによって、すべての学級において、「承認得点」と「被侵害得点」を向上させる手立てを具体的に考えることができた。

③指導案への位置付け

QUの結果を授業でも生かせるように、指導案作成の際には、『QUを生かした指導・援助』を、指導案中に位置付けた。ここには本時の授業で配慮したい生徒をQUの結果から数人抽出し、分析結果をもとにして指導・援助の方法を明記した。

こうすることによって、生徒に対する言葉かけや机間指導などが明確になった。また、このように指導案に位置付け、教科担任が見ることで、他の授業においても共通理解をして対応することができると考えている。

今までに作成した指導案と、指導案に書いた『QUを生かした指導・援助』の例は、以下の通りである。



- ・「自分の考えがクラスの意見になることがない」と答えるA男は、学級全体の交流や、班での活動に対して消極的な姿が多い。A男が話し合いに参加し、意見が出せるよう、おもちゃを観察する視点を明確にする。そして全体交流の場で意図的に指名し、A男の意見が全体に認められるようにする。〔家庭科1学年〕
- ・「学校内で私を認めてくれる先生がいる」の項目が低いB女のよさを、机間指導で見つけて価値付けることで、認めてくれる先生がいると感じさせる。〔学級活動2学年〕
- ・学級生活不満足群ではあるが、前回実施したQUに比べ、承認得点が上昇しているC男に、日々の自主学習の努力を想起させ、「グチ」や「ヤケ」を起こさず努力した結果、意欲的に学習に向かえる今の自分があることに気付かせる。〔道徳の時間1学年〕

(3)『よさ見つけ』の工夫

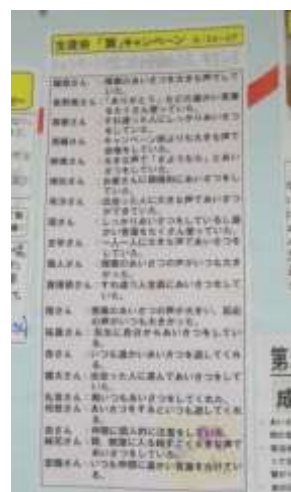
①学級でのよさ見つけ

居場所づくりのために、各学級で『よさ見つけ』

を行った。そこで見つけられたよさを「学級通信」、「教室の黒板」、「教室の背面掲示」などを使って紹介した。そのよさ見つけの仕方の一例が下記の通りである。

- ・生徒が学習計画ノートに書く一日の振り返りの中で出てきた生徒のよさを紹介する。
- ・学期の終わりや行事が終わった後に、生徒全員に学級名簿を配って、そこにできるだけ多く生徒のよさを書いてもらい、それをピックアップし、全員のよさを紹介する。
- ・係の活動や行事などで活躍した生徒のよさを担任が価値付ける形で紹介する。

このように、よさを紹介することによって、生徒一人一人が自分の行動に自信をもち、仲間から認められているという安心感をもたせることができた。また、通信で紹介することによって、「一人一人が頑張れるととてもいいクラスだということが分かりました。」という声をいただくなど、保護者にも安心感をもってもらうことができた。

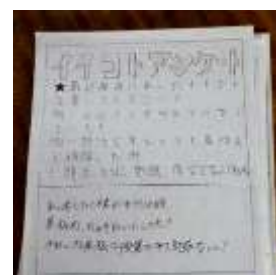


②生徒会活動でのよさ見つけ

よさ見つけを学級独自で行うだけでなく、生徒会活動を活用して行った。

活動開始時刻を守る時間行動の全校キャンペーンを行った時には、仲間のよい姿を一人一人が書き、それをピックアップして、生徒会執行部がお昼の放送で名前を挙げて紹介した。

広報委員会では、『イイコトアンケート』を学級ごとに実施し、そこに書かれた仲間のよさをピックアップして、紹介した。



4. 研究内容(2)-② 『絆づくりの工夫』

(1) 話し合い活動の工夫

学級の誇りを実感できるようにするためには、学級活動での話し合い活動を工夫することが大切だと考えた。ステージ構想図に、学級内の諸問題等の解決に向けて話し合う活動を中核として位置付けた。そして、生徒が主体的に問題解決をしているための指導・援助を充実させることにより、自分の学級に誇りがもてると思った。特に工夫したことは以下の3点である。

①必然性を生み出す議題提示

生徒が自発的な思いをもって、自分たちの問題を解決するためには、話し合いの必然性がなければならない。そこで、事前にリーダー会を行い、生徒自身が問題意識をもてるようにした。そして、本時の導入で、生徒が学級に議題を提示することで、話し合いの必然性を生み出すようにした。

実践授業①：「授業じまんづくりの取組」の中間反省会 平成25年7月4日 2年1組 学級活動

全校の取組である『授業じまんづくり』の中間反省会を行った。その話し合いをするにあたって、「2年1組の授業はじまんできるものになっているのか？」というアンケートをとり、集計したところ、33%の生徒が「まだ自慢できるものになっていない」と答えていた。この結果をリーダー会で話し合い、学級委員と学習委員に問題意識をもたせた。そして、学級活動の導入で、学習委員が問題として学級に提示することによって、学級の生徒に問題意識をもたせることができた。

その結果、多くの生徒が積極的に挙手発言をして自発的に問題を解決しようとする姿が見られた。

実践授業②：「繋がりを感じられる合唱づくりの取組」の中間反省会 平成26年6月26日 2年4組 学級活動

第2ステージの命の日の集会に行う学年合唱に向けて、『繋がりを感じられる合唱づくりの取組』を行い、その取組の中間反省会を行った。その話し合いをするにあたって、学級委員と合唱委員が話し合いをし、その中で合唱委員のKR女は「これまでの色々な活動をしっかりやってきた2年4組なら、もっと歌うことができると思うから、全力で歌ってほしい。」という思いをもつことができた。そして、話し合いの導入で、現在の2年4組の合唱の姿の動画を見せた後に、KR女はその思

いを語り、合唱をもっとよくしていくためにはどうしていったらよいかという思いを学級の生徒にもたせることができた。

②自発的な思いを湧き起こす生徒作文

目的意識がなく、なんとなく活動に取り組んでいる生徒に自発的な思いをもたせるためには、頑張っている仲間の思いを伝えることが有効だと考えた。そこで、この活動に前向きに取り組み、姿が変わってきた生徒を取り上げ、なぜ頑張っているのかという思いを作文にして紹介した。そうすることで、その思いを受けて自発的に活動に取り組むことができた。

実践授業③：「合唱発表会の取組」の振り返り 平成25年11月12日 3年4組 学級活動

『合唱発表会の取組』の中間反省会を行った。この話し合いでは、力はあるがその力を十分に発揮していないKR男を抽出生徒とし、KR男に自発的な思いをもたせることをねらった。そこで、「合唱委員として頑張っているKJ男の思い」を作文にして紹介し、KJ男の「仲間のためにがんばりたい」という思いや「頑張りたいけどなかなか上手く練習を進めることができない」という悩みを学級の生徒に伝えた。

この話し合いの最後の感想で、KR男は「自分自身、集中力が切れてしまうことがあることに気付きました。朝の合唱では、『もっと声がでてもいいかな?』と思っても呼びかけていませんでした。KJ男の思いを聞いて、一緒になって声をかけていきたいと思いました。」という思いをもった。このように、生徒作文を用いることで、自発的な思いをもたせることができた。

実践授業④：「体育大会の取組」の振り返り
平成26年9月17日 3年1組 学級活動

『体育大会の取組』の振り返りを行った。この話し合いでは、仲間と自ら関わることが不得意で、学級の活動に消極的であるNM男を抽出生徒とし、NM男に自発的な思いをもたせることをねらった。そこで、この体育大会の取組を通して、NM男と同じような状況であったNR男を支援し、NR男が「学級の一員としてできることを一生懸命がんばる姿」を生み出した。そして、話し合いの中で、NR男の「体育大会を通して自分を変えようと思って頑張った。そしてこれからも自分を成長させていきたい。」という思いを作文にして紹介し、学級の生徒に伝えた。

この話し合いで、NM男は「NR男は今までは発言する声が小さかったけど、体育大会の取組では軍リーダーではないのにたくさんの呼びかけをされていてすごいと思った。自分も係の仕事で大きな声で呼びかけていきたい。」と語り、自発的な思いをもたせることができた。

③見通しがもてる集団決定

話し合いをしたことで、その後の行動の見通しが明確になれば、生徒の主体的な行動につながっていくと考えた。そこで、話し合いの中で、今後の学級の動き、一人一人の動きがより具体的で見通しがもてることを、学級で集団決定するようにした。そうすることで、話し合いでもつことができた自発的な思いを行動にうつす姿が見られた。

実践授業⑤：『誇れるあいさつ・合唱の取組』の中間反省会
平成26年1月30日 2年1組 学級活動

第5ステージにおいて『誇れるあいさつ・合唱の取組』を2年生で企画し、その中間反省会を行った。この話し合いでは、「誇れるあいさつや合唱にするためには、今後どうしていったらよいか考えよう」を議題として、この取組で学級として改善したい問題点は「声の大きさ」だということを明らかにした。それを改善していくためには、日常生活の中で、一人一人が大きな声を出すことが大切だという意見を取り上げ、「授業のはじめと終わりのあいさつの時に班ごとに声を出す」ということを集団決定した。

この話し合いでは、学級の問題点を明らかにし、それを改善していくために日常生活の中でできる

ことを考えさせることで、見通しがもてる集団決定をすることができた。

(2) 班活動の工夫

生徒自らが「絆」を感じ取り、紡いでいけるように、班活動を工夫した。どの学級も生活班を6つにし、それぞれの班に「学習」「生活」「合唱」「給食」「整美」「図書」「保健」「広報」の8つの委員会の仕事を分担し、学級で活動することにした。(※2つの班は2つの委員会の仕事をもつ。)

帰りの会に『班会議』の時間を位置付け、班ごとにそれぞれの委員会に関わる活動についての話し合いを行った。その話し合いでは、班長が中心となり、「どんな取組を行っていけばいいのか」「班の中でどんな分担をして、誰がどのように動いたらよいか」などを話し合い、生徒たちの手で目標をもって毎日の生活をつくり出せるようにした。

この班活動が自分たちの手で行えるように、朝の会や帰りの会后、休み時間などに、定期的に班長会を行った。班長会では、各班で行っている取組を交流して、お互いの取組をよく理解して、学級委員や班長が協力できるようにしたり、活動が停滞している班にアドバイスして、よりよい活動ができるようにしたりした。

また、班活動にはホワイトボードを活用し、「班の取組内容」「班員の役割分担」「活動の評価」などを書き、教室背面の黒板に位置付け、活動の様子を見ることができるようにした。



(3) 思いを伝える工夫

生徒自らが「絆」を感じ取り、紡いでいけるように、自分の思いを仲間に伝える工夫をした。

①黒板メッセージ

ある学級では、帰りの会で語りきれない仲間に対してのよさや感謝のメッセージを、放課後に黒板に残す取組を行った。この取組中、次のような姿が見られた。

この学級のSR女は、自分に自信がなく、係の仕事で大きな声で話すことができなかった。そんなSR女を班長のHR女は励まし続け、SR女は大きな声で話すことができるようになった。そんな中、黒板メッセージに「班長のHR女が3分前着席の呼びかけを大きな声でしていた」と自主的に書き、自分のことを支えてくれた班長のHR女に自分の思いを伝えた。

この黒板メッセージは、学級の仲間のよさを書くだけでなく、誰が誰に書いたのかを明確にした。そうすることで、自分の思いが相手に伝わり、仲間との関係を深めることができた。

最初は、学級委員や班長などのリーダーだけが書いていたが、毎日黒板を見る中で、SR女のように自主的に書く生徒も増えた。



②絆づくりカード

ある学級では、「絆づくりカード」を作成し、定期的に仲間に自分の思いを伝えるようにした。このカードには以下の項目があり、「自分の意識が変わるきっかけになった仲間の姿」を書いて、それを学級で紹介したり、その人に渡したりして、自分の感謝の思いを伝えられるようにした。



絆づくりカードの項目

- ① 自分が頑張れたり、頑張ろうと思えるようになった**仲間の名前**。
- ② 自分が頑張れたり、頑張ろうと思えるようになった①の「**仲間の姿**」や「**仲間の声かけ**」。
- ③ ①の仲間の姿や声かけによって、「**自分が頑張れたこと**」や「**頑張ろうと思えたこと**」

この取組中、次のような姿が見られた。

この学級のFT男は、体育大会で軍リーダーを務め、自分に自信をつけ、後期の生徒会選挙で委員長に立候補することにした。そんなFT男の姿を見て、SA男は『絆づくりカード』に「FT男が委員長をやろうとする姿を見て、何もやらないと思っていた自分もやろうか迷った」と書き、その後、SA男は生徒会執行部に立候補することにした。SA男のカードをFT男に紹介すると、「自分のことが友達の頑張りにつながってうれしい」と答えた。

これらの取組を通して、自分の行動が仲間の頑張りにつながっていることが分かり、喜びを感じると共に、仲間との関係を深めることができた。

(4) 生徒会活動の工夫

学級の誇りを実感できるようにするために、生徒会活動においても、委員会活動や行事を行う際に、学級のよさを実感できるように工夫した。

①生徒会スローガンを生かす

平成26年度、生徒会スローガンが『伝統～あいさつ、合唱、無言清掃～』となった。



学級の誇りを実感するためには、学校に誇りを感じる大切だと考え、平成25年度の第5ステージ、当時の2年生を中心に、恵那東中学校の誇りになる活動を考え、取組を行った。それが「あいさつ」「合唱」「無言清掃」だった。

「あいさつ」「合唱」は、当時の3年生が力を入れて取り組んできた活動であり、それを後輩が引き継いで伝統にしていこうという意識で取組を行った。そして、3年生の卒業後、2年生が今まで頑張ってきた「無言清掃」も伝統にしていきたいという願いをもって、1、2年生合同で無言清掃の取組を行い、平成25年度を締めくくった。

以上のような取組を意図的に行うことによって、次年度の生徒会スローガンに繋がった。このような具体的な活動内容がわかるスローガンによって、恵那東中学校のよさを実感できるようになった。



②委員会を生かす

学習委員会

平成25年度、学習委員会では、『授業じまんづくり』『最高の授業づくり』をテーマとした活動を取り入れた。この取組を通して、自分の学級がじまんでいけるよさを考えたり、自分の学級が目指す最高の授業に向けて、仲間とともに活動したりした。この取組を通して、自分の学級のじまんでいけるものをつくり、学級に誇りをもつことができた。



生活委員会

平成25年度、生活委員会では、縦割りであいさつ活動を行った。これは、体育大会で同じ軍だったクラスが全員集まり、朝、週に一度生徒玄関であいさつを行うという活動である。平成26年度は、縦割りで班ごとにあいさつ活動を行った。これらの活動を通して、仲間との繋がりをより深めることができた。

③行事を生かす

体育大会

体育大会は、学級づくりを目的の一つとし、学級の生徒は全て同じ軍になるようにしている。生徒会の取組として、軍練習をしていく中で見つけた軍のよさを生徒一人一人が書き、それを『軍の自慢』として、軍リーダーがまとめて掲示した。



また、体育大会で中心となって軍を引っ張った軍リーダーに学級の仲間から感謝のメッセージを渡した。この企画は生徒会執行部が中心となって行ったもので、軍リーダー以外の生徒を体育館に集め、そこで自分のクラスの軍リーダーにメッセージを書き、それを冊子にして体育大会の最後にサプライズとして軍リーダーに渡した。体育大会の最後には、団長のはたらきかけで、全校生徒が大きな円になり、全員でウェーブをして、最後に万歳をして体育大会を締めくくることができた。

このような取組を通して、学級のよさを実感し

たり、生徒同士が感謝しあえたりすることができた。



合唱発表会

合唱発表会では、縦割り交流会を行い、交流会後には一人一人が交流した学級のよさを書いて渡した。それをまとめて掲示することによって、自分の学級のよさを実感することができた。



Ⅲ 成果と課題

1. 生徒の変容

(1) 個の変容 *平成25年5月と11月のQUの結果より
ある学級の5月の結果で、承認得点が低い生徒が2人いた。それらの生徒の学校生活意欲点を分析すると、学習意欲と進路意識が特に低く、テストの結果や成績からも勉強が苦手であることが分かった。そこで、職員でQUの結果を分析した時に、教科担任に「これらの生徒は勉強に対して苦手意識があるので、机間指導などで個別に声をかけ、勉強面で自信をつけられるようにしてほしい」とお願いした。その結果、11月の結果では2人の生徒は学級満足群に属し、学習意欲得点も5月より向上していた。このように、学校生活意欲点を分析し、多くの職員で共通理解することで、生徒の学級満足度を高めることができた。

(2) 全体の変容

【学級満足度】 *平成26年4月と12月のQUの結果

%	1年	2年	3年	全国
学級生活満足群	69→70	54→60	65→70	37
	1%↑	6%↑	5%↑	
非承認群	11→5	13→9	12→12	17
	6%↓	4%↓	0%→	
侵害行為認知群	9→12	13→7	8→6	15
	3%↓	6%↓	2%↓	
学級生活不満足群	11→13	21→23	15→11	31
	2%↑	2%↑	4%↓	

【学校生活意欲点】 *平成26年12月のQUの結果

%	1年	2年	3年	全校	全国
総合	84.6	75.1	81.3	80.3	75.4

『学級満足度』の結果を見ると、4月より12月の方が、「学級生活満足群」に属する生徒が少し増加した。本校は全国平均と比べて、「学級生活満足群」に属する生徒が多く、「学級生活不満足群」や「侵害行為認知群」に属する生徒が少ない。これらの結果から、いじめやかからかいなどが少なく、安心して生活している生徒が多いと分析することができる。

また、12月の『学校生活意欲点』の結果を見ると、全校全体の総合点が全国平均より約5%上回っている。この結果から、意欲的に学校生活を送っている生徒が多いことが分かる。

『学級満足度』が低い生徒は分析すると、勉強が苦手な生徒が多く、『学校生活意欲点』では、全国平均と比べて「学習意欲」「進路意識」の項目がやや低い。これらの結果から、勉強が分からないことや将来の目標がはっきりしないことも、学級生活に満足できない要因ではないかと考えられる。それを解決していくことが今後の課題である。

2. 成果と今後に向けて

(1) 成果

【研究内容(1)－① 学級経営案の工夫】

○行事を核として1年を5つのステージに分け、ステージ目標を漢字一文字で表し、めざす姿を明確にすることで、学年職員が指導の方向を明確にすることができた。

【研究内容(1)－② ステージ構想図の工夫】

○学級の実態を踏まえ、変容させたい生徒を抽出

し、その生徒の意識の変容を構想することで、個への指導・援助を明確にでき、見通しをもつことに有効だった。

【研究内容(2)－① 居場所づくりの工夫】

- 学年会などで生徒の様子を交流する時に、ハイパーQUの結果を用い、多くの職員で共通理解、共通行動することで、生徒の学級生活満足度を高めることに有効だった。
- ハイパーQUの結果を分析して、その手立てを指導案に位置付けることで、授業での指導・援助を明確にすることができた。
- よき見つけを行い通信や掲示物で紹介することで自分や仲間のよさを実感させることができた。

【研究内容(2)－② 絆づくりの工夫】

- 学級活動の話し合いで、事前にリーダー会を行いリーダーに問題意識をもたせること、頑張っている生徒の思いを作文で紹介すること、今後の見通しがもてる内容を集団決定することは、生徒に自発的な思いをもたせるのに有効だった。
- 班活動など仲間との関わりの場や、自分の思いを仲間に伝える場を設定することで、仲間との関係を深めることができた。
- 生徒会活動を生かして、学級ごとに話し合ったり活動したりする場を設定することは、自分の学級に誇りをもたせるのに有効だった。

(2) 今後に向けて

個の実態に応じたきめ細かい指導と、見通しをもった学級づくりのあり方を、今後も一層究明していくことが必要である。そのために以下の指導を一層充実させていきたいと考えている。

- 自分の思いを仲間に伝えたり、仲間の思いを受けてどんなことを感じたのかを表したりする等、生徒の表現力を鍛える指導。
- 生徒会活動等において、生徒の主体的な活動を支え、生徒自らが願いをもって活動を工夫し推進できる指導。

参考文献

- ・『生徒指導リーフ「絆づくり」と「居場所づくり」』国立教育政策研究所
- ・『学級・学校文化を創る特別活動中学校編』国立教育政策研究所
- ・『学習指導要領解説特別活動』(小学校、中学校) 文部科学省